

---

# 17年のラブレター

ナカジマ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

17年のラブレター

### 【Nコード】

N8571G

### 【作者名】

ナカジマ

### 【あらすじ】

17年前の純粋な恋愛。携帯もポケベルさえも無かったあの頃。アナログがもつひたむきさ。今、30代の人にささげます。

## 高校2年生（前書き）

この物語は事実がもとになっております。

## 高校2年生

事実にもトツクおはなし。

伊藤君は某市内で最も学力が低い普通科と噂される“北高校”略して“北高”(・・・あまり略されてない。)に通っていた。唯一のいいところは

ジョシ

の比率が高く、7:3と高いところだ。ジョシ専用クラス。いわゆる「女クラ」があつたくらいだ。

伊藤は特にオコトマエでもなければヤンキーだったわけじゃないが、いわゆる。ソコソコアソコなポジションだった男だ。校内でも目立つ方だったためにタマに下級生から

「センパイイ^^」

とのお声掛けがあつたようだ。よくありがちな“アレ”だ。

「センパイ！一緒に写真撮ってください^^」

や

「センパイ！この質問に教えてください!!」

と言いながらそつと渡されるテガミ。

お・・・せんぱいは付き合っている人いますか？

せんぱいの好きな色はなんですか？

せんぱいの好きな髪形は？

e t c・・・

今、思い出してもうらやましい・・・というかネタマシイ。

でも、伊藤は意外に真面目な奴で「好きな女以外は興味ねーな。」  
とよく言っていた。

・・・スカシタヤツダ。

中学からの友人で鈴木ムネオ（後に大学6浪。通算36校に落ちる  
という偉業を達成する。本名だ）、本田と健オレと毎日のように、とい  
うか、毎日つるんでいた。

時は1991年。高校2年生であつた。。。

この4人は本田デブを抜かしてみんな陸上部に所属。毎日のように練習  
にいそし・・・んではいなかった。毎日、体育館に勝手にバレーコ  
ートを張り、バレー部のジョシに罵倒を浴びつつ、弓道部の後輩（  
かわいい子が多かった。しかもハカマ姿で2割増）にちょっかいを  
出す日々であつた。

一方、本田デブは何をおもったかボクシング部に入部していた。そう。  
身軽なデブだった。

グローブになりたいのか？

というオレの心配をよそに本田は頑張<sup>デラ</sup>っていた。当の伊藤はなんでもソコソコこなす男。でも。好きなジョシには全くの

『ダメ男』

であった。

伊藤は3年間ダイスキだった女の子がいた。

同じ部活の短距離をやっていた加奈ちゃん（乳大）特にかわいいわけじゃないが、いつも笑顔でいる明るい子だった。笑うとき、顔全体を使い切るように笑う笑顔だった。

短距離を走るといつも「ブルルン」としていた。健もソコは気になっっていたのは言うまでもあるまい・・・

加奈ちゃんの友達で佐藤さんという子がいて、この二人はいつも一緒にいた。同じ短距離でおかっぱばい髪型が印象の子で3日にいっぺんは教科書を忘れて健に借りにきていた。佐藤さんは人間に与えられた“忘れる”という機能をフルち・・・活用できる女の子だった。

ウチの高校はバカ高だけにヤンキーが多く、俺らが一年生のころの三年生が特に怖くてしょっちゅう喧嘩があった。校内での派閥と近くの工業高校とよくもめていたのだ。その中でも比較的話しやすい先輩がいて、あるとき先輩が血だらけになって部室にやってきた。

ボコられたらしい。

俺ら一年が先輩を保健室に連れて行く時に加奈ちゃんに見つかった。その姿を見て加奈ちゃんが顔面蒼白。ボロボロ涙を流しながら先輩のところに走ってくる姿をみて

「加奈ちゃんに好きな人がいる」

と俺らは気がついた。

北高は2両編成の単線の電車がメインの通学手段だ。ただ、ものすごく遅くて、自転車と勝負しても負けるくらいだ。だって、次の駅が見えるんだもん。遅くもなるよ。。。

帰り道

伊藤「アレってさ、やっぱり加奈ちゃん好きってことだよな？」

健「そうでしょ。どうみても。」

伊藤「・・・」

健「・・・？ナニ落ち込んでんの？オマエ。加奈ちゃん好きなの？」

と聞いてみた。伊藤はプライドの高い男で好きな女とか絶対にいわない奴だった。だから期待もしてなかった。

伊藤「・・・絶対いふなよ」

健「!!!!?・・・わかつてるよ」

ここで伊藤の気持ちをはじめて聞いた。誰にも言っていなかったに違いない。今日のことがショックで思わず口走っただけらしい。

この日を境に俺らは仲良くなっていた。

・・・先輩が卒業して俺らが2年生になってハジメテの後輩がデキタ！

「先輩！」

言われてキモチイイランキング上位常連のセリフだ。もちろん、モーターのなかではかわいいジョシに言われているのはいうまでもあるまい。

部活にも後輩が出来て顔見世の日がキタ

鈴木「陸上部に入ってくる奴なんかオツパイも筋肉だぜ？期待すんなよ」

伊藤「・・・ソーとはかぎんねーだろ。」ちょっと怒り気味？

健「ん」（3人だと6パイか・・・）」

新入生が顧問に連れられてやってきた。

伊藤鈴木健「!!!!」



健「あれ？結構かわいくない？特にあの二人」

鈴木「あけみちゃんとナナミちゃんだろ」

伊藤「なんで知ってんの？お前」

「だってお前ら昨日途中で学校フケたる？そんなとき挨拶に来たんだよ。よろしくおねがいしま〜す^^って。」

健「んあ〜！？だってさっきお前、期待スナナ！とか言ってたろ！」

「・・・だってそのほうが面白いじゃん。お前らの反応。オレをカラオケ連れてかなかった罰だ」

（・・・コイツ。後でバトン渡すフリしてヤツテヤル！）

健と伊藤がアイコンタクトできた貴重な瞬間である。

バトンプスの練習でバトンが凹むほどの衝撃を与えた後、歓迎会ということで鈴木の家に入生から先輩まで集まる事になった。当然、酒盛りである。入生のなかには酒がはじめてに奴もいるだろう。

入生歓迎会。総勢20人ほどであろうか？

ソコにはあけみちゃんを狙う鈴木と、加奈ちゃんと仲良くなりたいが、なれない伊藤、近くにジョシがいるだけでモーソー炸裂気味の健の姿があった。。。

???

ナンダ？

意外にもあけみちゃんの鈴木を見る目が輝いている。

「鈴木センパイって足速いんですね！？」

くっ！そうなのだ。コイツは足が速いのだ！陸上部では足が速い事が顔の良さよりも優先するのだ！！

・・・オレもアツチの速さなら9秒台も切れるのに。。

オレの残念な比較をよそに、何となくイイムードを感じる。・・・  
ヤバイ。阻止しなければ！！

「でもこいつ電車でハナゲ抜く男だよ？1本抜いた時の衝撃で他のおとなしくしていたハナゲ達が束になつて顔を出すような男だよ？しかも、そのハナゲを電車の椅子に植えるんだぜ！」

「キャハハハ」 センパイおもしろい

・・・よし！

「健・・・必死だな。。。」

あけみちゃんは本気で面白がっている・・・

「えっ！！ヤダー！」

的ナ反応を期待していたが、ムダに好奇心を煽ってしまったようだ。こんな状態のジョシは何を言ってもムダだろう。フト、伊藤が気になって伊藤を探す・・・

・・・？

ビミョーなポジション取りをしている。常に加奈ちゃんの近くにはいるのだが必ず間に一人挟む感じだ。効果のなさそうなマンマークを敢行中であつた。

・・・ケナゲだ。伊藤、ケナゲだな・・・泣けてくる。極度の照れ症な伊藤には“ギリ”のラインだろう。ハナゲ鈴木はほっておき、少し助けてやろうか。

「加奈ちゃわわ〜ん 加奈ちゃんはどうな男子が好きなの？」

オレはこういったテンションで行く事に全く抵抗はない男だ。両親に感謝したい。しかし、当方の意図を図りかねた伊藤はムツとしている。

「へっ！？・・・健ちゃん何言ってるの？」

「やっぱり引つ張ってもらいたい？それともドーンと「俺について来い！！」的な男子タイプ？加奈ちゃんが！」

「・・・なんで男子のほうなの！うゝん、やっぱりある程度はリードして欲しいなー」

加奈ちゃんはいつもの全体的笑顔ではなく、ちょっとハニカミ気味な笑顔を見せてくれた。伊藤はダイブ食いついてきている。

「へゝそーなんだ。あ！オイ！おとう！いや、伊藤！結構、オマエそーじゃねーの？」

最初は意図を図りかね、何言っただこいつは・・・的な目線の伊藤がやっと俺の意図を察したらしい。伊藤はカンは悪くない。

高校生活2度目のアイコンタクトがとれた瞬間だった。

「・・・どっちか？と言われたらそーだね」

一度もジョシと付き合った事もない伊藤はさらっと言っただけだ。モーソーの中ではそうなのだろう。

「そうだよなゝ伊藤は長崎屋で迷子になりそうな俺の手を引いてくれるモンネ」

「健ちゃん迷子になるの・・・伊藤君も大変だね」

「そつなんだよ。コイツさー勝手にいなくなるからさ。みんなで遊んでる時にもいなくなっさー店内放送かけてもらったことあるよ・

・・」

「あーあったね。ロベルト事件でしょ。」

「アハッ！ナニそれ」

「健がまたいなくなったつーからさ、俺の中の何かがウズキだしてさ。健をブラジルからの留学生だつて受付の人に嘘ついて呼び出してもらったんだよ。」

「鈴木もノツちゃって、受付の人に「ロベルトケンバツチヨでお願いします」って真顔で言つててさ、受付の人もさすがにそんな奴イネーだろ風に思つたらしいけど呼ばないわけにいかなくて

「清明町からお越しのロベルトケンバツチヨ様」ロベルトーケンバツチヨ様」

つて呼んでたよ」

「信じらんねーと思わない？スゲー恥ずかかったよ・・・俺が来た時の受付のオネーさんの顔。100%日本人じゃん！！的ナ顔してたもんね！まあ、俺はオネーさんのステキな笑顔が見れたから良かったけど。」

「ハ・・・ハ、おなか苦しい・・・みんなバカだね」

その頃、鈴木は

「ほら！筋肉触ってみ！ほら！」

・・・こいつ、１７歳にしてオヤジ技をモノにしてやがる。思えば後の６浪という偉業の片鱗であつた。

何となく加奈ちゃんと話せるようになってきた伊藤は置いてゆき、俺は何となくコップを片しながらかわいい後輩に

“ 気の利くやさしいセンパイ ” 演出

に勤しんでいた。あわよくばそれをみた後輩の女の子に手伝ってもらい、仲を深めるチャンスだ。しかも、同時に先輩にも好意的に捉えてもらえるという画期的な作戦だ。

「健ちゃん手伝うよ」

！！

キタか！？俺の時代がっ！

「ん。ありがとう。」

しまった。。。佐藤か・・・ポイントを誤つたな。コイツも普段ツンツンしてなければ結構可愛いんだけどな・・・河岸を変えるしかあるまい。佐藤は忘れんボさんだが、普段はツンツンしているクセに感情の起伏が激しいという、ナニを考えているかわかりにくいジヨシだったのでチョット苦手だった。

「健ちゃんってさ、みんなのトコにいつてるよね？周りに気を使っ

てないで自分も飲めば？後輩も健ちゃんと話してみたいと思ってると思うよ」

「イイ奴じゃないか！！意外に！ただのメンドクサイ忘れん坊さんじゃないな〜！」

「そーかな〜。ほら、せめて俺が片付けしとかないと先輩に怒られるしな」

2コ上の先輩はオツカナカタが1コ上は愉快的先輩ばかりで全く怒られた記憶が無かった。2コ上の先輩の下だからこそこうなったのかもしれないが。

その日は皆ソレゾレの思惑がソコソコの結果を出してのお開きだった。鈴木の家から一文字のチャリで帰る途中にアルコールの入った頭で春の夜空を見上げてみた。

サラリーマンのオヤジ達がお酒を飲んで帰る時もこんな気持ちなのかもしれないな・・・気持ちいいもん。少しフワフワした気分であふらしながら帰った。オヤジが酔っ払ってきても許してやろうと思いつながら。

その後、鈴木はあけみちゃんと付き合う事になり、みんなに「ヤツたら教えるよ！！」と言われつつ、彼女のいない先輩の地味な“練習メニュー追加”のいじめをこなしていた。

鈴木は1年生の後半から急速に400mのタイムを伸ばしており、

県大会の準決勝がMAXの状態を抜け出す希望の星と変貌を遂げつつあった。400mは非常に苦しい距離だ。酸素は300mまでしかもたず、最後の100mは気力である。スゲーきつい。

鈴木の1年の時のタイムは55秒で投擲の俺より遅かった。でも、54秒を切ったあたりから何かをつかんだらしく急速にタイムを縮め、今ではウチで一番速い先輩の51秒と並んでいた。だから、先輩の追加メニューも期待値込みだったに違いない。

伊藤は100〜200mの短距離で成績はソコソコ。俺は目立たない槍投げで可もなく不可もなく、非常に地味な存在であった。

100×4のリレーでは何気に俺ら3人が入っていた。100mのタイムはこの3人が良かったから。俺も短距離への転向を進められていた。もう一人は先輩の「タクヤ」。結構速い。俺は勝てなかった。タクヤに勝てなかったのも短距離に転向しない理由だったかもしれない。コイツは天パのサル顔のくせに「女にモデル」と豪語していた生意気な奴だった。

猿の惑星に出てきたコーネリアスにそっくりだったので「コーネリアス！」と呼んであげていた。わざわざビデオを貸してやってまでだ。

伊藤はぎこちないながらも加奈ちゃんと微妙にいいところまでこぎつけていた。しかし、マダマダ危うい。累卵の危うさだ。しかも如何せん“不器用”である。その点タクヤはすんなりいける奴だった。やるじゃねーか。しかも照れ症である。伊藤はその想いを上手く伝えきれないでいた。



俺から見ても・・・意外にいけんジャーノ？と思えるくらいにその関係は発展しているように見えた。その頃には伊藤と俺は完全に心を許していた。もちろん、鈴木とも仲が良かったが伊藤とは特にウマが合った。俺らはよくカラオケに行った。毎日ともいえる位。そのカラオケで伊藤は

「加奈ちゃん！！ダイスキだー！！！」

と叫んでいた。

そんなこんなで2年生の夏は過ぎてゆく・・・

俺らが3年生になった頃には加奈ちゃんもさすがに伊藤の気持ちに気がついていて、それでも時折、満更でもない満面の笑み、あの顔全体で笑うようなステキな笑顔を見せていた。

その頃の俺は全く眼中になかった後輩の精一杯のアプローチを受けていた。

・・・なんでこんなのバツカシに。。。とは思いつつも、自分に想いを寄せてくれる貴重な存在を断ち切ることが出来なかった。

この後輩ダルマスタイル、砲丸の選手だ。自分と似ているから砲丸を選んだのかも  
しれない。類は友を呼ぶらしい。

俺も投擲だからどうしても顔を合わす。キマズイ。

ところで、ウチの北高陸上部にもジョシマネージャーがいる。しかも結構かわいい

しかしながら暗黙の了解で短距離／中距離用と決まっていた。

・・・くそっ！俺だってリレーは出るのに！

このときほど投擲のマイナーさを恨んだときは無かった。

このジョシマネの中で一際オトナっぽい

「レミ」

がいた。大学生と付き合っているという噂があり「ヤツテイル」との評判であった。田舎の高校ではそれだけで異質な存在だったのだ。しかしながらウマソウな身体ツキをしていた。長めのストレートに細めの腰。胸は小ぶりだが色白なのがニクタラシイ。俺はこのレミとは話しやすかった。

レミのもってくるタオルはほのかにレミの匂いがした。

俺はレミのタオルが好きだった。

この頃になると

鈴木      ラブラブ

伊藤＆加奈      両想いっばいがお互い何も出来ず

健<sup>オレ</sup>      <sup>ダルマスタイル</sup>後輩の猛烈アピールにより他のジョシには一定の距離を置

かれる。

の構図が出来上がっていた。季節は3年生の秋を迎えていた。

最後の大会で鈴木が次走者のスパイクに足を引つ掛けてしまい、散々な結果となった。そのメンタルを立て直す事ができずに個人種目も散々だった。俺たちの夏は終わった。

「お前ら免許どーする？」みんなに聞いてみた。

3年生は冬休みに入ると免許を取りにいけるのであった。一部の生徒は夏休みから行っていたが。

「あー？取りに行くに決まってんじゃない。あけみとドライブ行く約束したし」

・・・いつのまにかヨビステに格上げシテヤガル。ヤツたか！？

「どこに行くのお前ら。吾妻？ケンコウ？吾妻は教官が厳しいらしいぜ」仲の良かった先輩に聞いてきたらしい。伊藤は女子の先輩とは仲が良かった。照れ屋さんの伊藤がなんで？？と思い、聞いてみたことがある。

伊藤曰く

「年上は女じゃねーから」

言うじゃないか童貞がっ！・・・ま、人のこと言えないけど。

「うん。でも吾妻のほうが近いし、親父の知り合いがいるからな」

そうなのだ。吾妻は評判悪いが親父の知り合いがいるので“オマケ”してもらえるかも という甘い期待を持っていたのだ。ボク。

「ケンコウはクラウンらしいよ。教習車。乗りたくねえ？クラウン。あゝあ、クラウンであけみとドライブしてーなーあ・・・」

くっ！クラウンの広い車内をフル活用か！？ハナゲを電車に植林していた男とは思えん・・・

「オレはやっぱし吾妻だな。親父の知り合いにオマケしてもらえるかもだし。」何となく、ちょっとしたコネを自慢したくなってしまう。

「えゝ汗、俺、ケンコウの方がチケーもん。」そんな鈴木を軽くスルーし

「伊藤は吾妻の方がチケーベ？一緒にいくべよ」

「うん。そーだな。鈴木もいーからこいよ。俺らがイネーとさみしーだろ？」

「んだなゝ。そーすつか！！んじゃー今度の土曜日に申込みかねえ？」

以前は週休1日だったが、俺らが3年生になってから隔週2日の休みが導入されることになったのだ。みんな「ずるくね?」「俺らちつとしかねーべ」と言っていた。

家の方向が違う鈴木と別れて伊藤と2人で帰ることになった。いつもは2人で激安ラーメン屋

「キンコン館」

でミソラーメンを230円で食っていくのが習慣だった。しょうゆは190円だったが、高校生の食欲をもつてしても不味くて食えなかった。まあ、それでも金のない俺らには充分だった。

なんといつても“漫画”があつたのがデカイ!!

俺らはけっしてウマイとは言えないミソラーメンをかきこみながら

「・・・オマエさ、加奈ちゃんどーすんの? いーかげん告白したら?」

「! ! ! ! ! キンコン館ではやめよーぜ。。。周りに人いるじゃん」

「おー。そだな。んじゃ、コレ食ったら真浄<sup>まじやう</sup>円のハトにえさくれにいこーぜ! !」

「・・・オマエ、ハト好きな。なんで?」

「バカか? 伊藤。あの首のフリっぶり!! 見たことねーのか? 歩く時何回振っているかわからんほどのハイスピードだぞ! しかも、歩

くスピード連動型だ！おそらく、一秒間に16回は振ってるね！まさに16ビートー！」

「・・・」

「止めたいね。。。あのクビ。あのクビリズムを止めたらどうなるのか？アレはリズムだろ？人間で言うところのウデフリに値するわけだ。でも、人間はウデ止めても動けるじゃん。そこで湧くだろ？疑問がっ！ふっ！」

「止めても歩けるのか！？ってな」

「・・・ま、まあな」

「うおーし！！食ったぞ！！行くぞ！！」

「・・・入りすぎだから。気合。何しに行くか覚えてるか？」

「おっけ」

人を魅了せずにいられない満面の笑みとともに俺はお寺に向かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8571g/>

---

17年のラブレター

2010年12月30日14時18分発行